

少女雑誌の部屋から



今月19日より、新しい企画展『少女雑誌の中に見る熊本ゆかりの人々』が始まります。ということで、今月号は展示に先立ちまして“くまもと特集”をお届けいたします！

少女たちの教養を育む雑誌としての側面もあった少女雑誌には、優れた文学作品や知識を深める情報が数多く掲載されていました。そして、名だたる執筆陣が才筆をふるう中に、熊本出身、関わりの深い人物が多く含まれていることに驚かされます。

ここでは、少女雑誌に執筆した一部の郷土作家について紹介しております。展示のほうもぜひご覧くださいね。

菊陽町出身の作詞家

宮本旅人

Miyamoto Tabito

熊本県玉名郡和水町に生まれ、幼少年時代を母方の郷里菊陽町で送る。本名は護。作詞家・小説家。熊本第二師範学校（現・熊本大学教育学部）卒業。一時上京して若山牧水に師事。牧水より「旅人」の名を与えられる。その後熊本で小学校教員となるが辞して作詞家を志し上京。生計をたてるために東京中野の小学校に勤務した後、本格的な作詞活動に入る。歌謡曲や校歌を作詞したほか、少年雑誌や少女雑誌で児童ものの小説やルポルタージュ作品などを発表した。晩年は郷里熊本で歌謡誌「火の国歌謡」を創刊・主宰し、後進の育成に努めた。

1907-1982

菊陽町中央公民館敷地内には旅人の歌詞を刻んだ歌碑が建てられている。（昭和51年建碑）

内藤 濯（ないとう ありう） 1883—1977

熊本市生まれ。フランス文学者。翻訳家。東京帝国大学仏文学科卒業。サン＝テグジュペリの『Le Petit Prince』を「星の王子さま」と訳したことや、明治41年に雑誌の中でドビュッシーの存在を日本に初めて紹介したことで知られる。

岩下 小葉（いわした しょうよう） 1884—1933

熊本県山鹿市生まれ。本名は天年。編集者、翻訳家。早稲田大学英文科卒業後、島村抱月の推挙により実業之日本社に入社。大正6年にはバーネット原作の「秘密の花園」を本邦初訳出版。その後『少女の友』の主筆を務めた。（二代目、四代目）

高群 逸枝（たかむね いつえ） 1894—1964

熊本県宇城市生まれ。詩人、女性史研究家。熊本女子師範学校、熊本女学校で学ぶ。その後、新聞に連載された「娘巡礼記」が好評を博す。上京後の昭和5年、平塚らいてうらと無産婦人芸術連盟を結成。雑誌『婦人戦線』を発表するが翌年廃刊。世俗と交渉を断ち、女性史研究に没頭。

小山 勝清（おやま かつきよ） 1896—1965

熊本県球磨郡相良村生まれ。小説家。青年期に労働運動に関心を抱き、堺利彦の門下となるが、後に帰郷。再度上京し、柳田國男に師事して民俗学を学ぶ。大正14年、『或村の近世史』を刊行。童謡も書き始め、創作に活路を得る。

徳永 直（とくなが すなお） 1899—1958

熊本市生まれ。小説家。11歳で見習い印刷工となって以後、様々な職業を転々とし、23歳で上京。印刷所の組合運動の中心となって活動し、争議で失職。その体験を書いた「太陽のない街」で労働者出身のプロレタリア作家として評価される。

中村 汀女（なかむら ていじよ） 1900—1988

熊本市生まれ。俳人。江津湖畔に生まれ育つ。熊本県立高等女学校、同校補習科卒業。18歳で句作を始める。結婚後、一時は句作を中断したが再開。高浜虚子から大きな影響を受けた。昭和22年に『風花』を創刊・主宰。随筆家としても活躍した。

荒木 精之（あらか せいし） 1907—1981

熊本県阿蘇市生まれ。小説家、歴史家。日本大学史学科在学中から作家活動を開始。昭和9年に帰郷。父が菊池市に設立した隈府女子技芸学校（父の死後は義母が継承）で2年間教師をしながら作家活動を続けた。昭和13年、月刊誌『日本談義』を創刊。一貫して地域の文化振興に貢献した。

石牟礼 道子（いしむれ みちこ） 1927—2018

熊本県天草生まれ。生後間もなく水俣に移住。小説家、歌人。昭和40年に水俣病を題材にした小説「海と空のあいだに」を雑誌『熊本風土記』に連載。のちに「苦海浄土」として出版され大きな反響を呼んだ。石牟礼作品は「鎮魂の文学」として高く評価されている。